

須賀昭一先生のご逝去を悼む

小林 巖 雄* 後藤 仁 敏**

第二次世界大戦後、日本の歯学界の発展に尽くされてこられた須賀昭一先生は、私ども化石研究会の活動とも、決して切り離すことのできない存在で、多くの化石研会員が先生から直接あるいは間接に、ご指導・ご援助を受けてきました。とりわけ、先生は、ヒトの歯の硬組織を広く生物界の石灰化組織との比較のなかで、しかもその進化のなかでとらえようとする研究を進めて来られたことから、動物の硬組織やバイオミネラル（生体鉱物）の研究に携わる会員は、先生からさまざまな形で多くの斬新なご教示を得てまいりました。

1992年の暮れも押し迫った12月26日に、先生の悲報を受けたのは、余りにも突然でした。昨年4月に胃の手術で入院されましたが、その後も学会などで活躍されておられ、お元気で研究・教育と歯学部部長の要職を続けておられるものとばかり思っていました。研究室へ訪れることもなく過ごしてしまったことが、いまとなってはひどく悔やまれます。病魔胃癌との戦いに勝てず、多くの仕事を残したまま他界されたことは、まことに残念でなりません。

先生は、1927年2月に埼玉県大宮市で生まれ、1943年に市立京北実業学校を卒業後、1944年日本歯科大学専門学校（現在の日本歯科大学）に入学、同校を1948年に卒業、歯科医師の資格を取られました。同年の秋には、日本歯科大学病理学教室の副手になられ、研究と教育に携わることになりました。1958年に、31歳の若さで同教室の教授に昇格され、その後多くのお弟子さんを育てて参りました。1960年から2年間にわたって、ドイツ・ボン大学歯学部とスウェーデン・マルメ市王立歯科大学に留学され、スウェーデンではエナメル質の研究で有名な G. Gustafson 教授に師事されたと聞いております。1992年4月からは、日本歯科大学歯学部学部長になられました。

化石研究会との出会いは、私どもの記憶によると、1966年9月に箱根で開催された硬組織シンポジウムではなかったかと思えます〔荒谷ほか編(1969)『硬組織研究—歯の形成を中心として—』医歯薬出版、東京〕。この時、歯学・医学・動物学・水産学の研究者に混じ

って、古生物学を専門とする硬組織の化石を研究している化石研会員が参加し、先生に接したものでした。そして、1967年6月25日の第26回化石研究会において先生に「歯牙硬組織形成の組織化学」と題する講演をしていただいたのが、化石研究会との最初のおつきあいとなりました。

さらに接近を加速させたのは、私どもが化石の微細構造を研究し始めた院生・学生時代の1967年秋に、非常勤講師として東京教育大学地鉱教室にお招きできたことによると思われます。「硬組織の研究—歯牙組織の構造とその形成—」と題する特別講義を聴いた院生・学生はみな大きな感銘を受け、近代化した化石研究の推進へと拍車をかけられました。この講義こそ、私どもの硬組織研究の原点であり、この時の講義ノートはいまなお私どもの机上にあり、折に触れて参考にさせていただいているのです。先生の化石への興味はこの頃急速に進展し、やがて歯の硬組織を生物界の石灰化組織のひとつという広い視野のなかでとらえ、進化・系統発生の歴史的なものの見方の重要性を認識されたのではないかと拝察されます。

このことを契機に、日本歯科大学の病理学教室と教育大学の森研究室との交流が深まり、ハイキングをかねて成田へ化石採集に出かけたり、病理学教室での直接の指導を受けさせていただく機会が生まれたりしました。小林もその一人でした。また、化石研究会の編集による『化石の研究法』（1971、共立出版、東京）には、執筆者として加わっていただき、マイクロラジオグラフィとX線マイクロアナライザーの章を担当していただきました〔その後、先生らが編集された『歯の研究法』（1972、医歯薬出版、東京）は本書をまねて作られた本であると聞いています〕。

1977年の秋に、第3回バイオミネラリゼーション国際シンポジウムが三重県賢島で開催された際には、「魚類のエナメルロイド中のフッ素」について魚類の系統に関連させた研究を発表され、私どもの注目を集めました〔Omori, M. and Watabe, N.(eds.) (1980) The Mechanisms of Biomineralization in Animal and

* 新潟大学理学部地質鉱物学教室 Dept. of Geology and Mineralogy, Fac. of Science, Niigata University.

** 鶴見大学歯学部解剖学教室 Dept. of Anatomy, Sch. of Dental Medicine, Tsurumi University.



Biomneralization'90での須賀先生と化石研会員参加者。
小田原のアジアセンターにて、1990年10月11日。

Plants. Tokai University Press, Tokyo]。そして、13年後の1990年の秋、ふたたび日本でこのシンポジウムが開催されることになり、先生はその組織委員長としてすべての準備を進められました。1990年10月、小田原で開催された第6回バイオミネラリゼーション国際シンポジウムは、世界各国から参加した約150名の参加者により、80題もの発表がおこなわれ、大成功をおさめました [Suga, S. and Nakahara, H. (eds.) (1991) Mechanisms and Phylogeny of Mineralization in Biological Systems. Springer-Verlag, Tokyo; Suga, S. and Watabe, N. (eds.) (1992) Hard Tissue Mineralization and Demineralization. Springer-Verlag, Tokyo]。先生は、今年11月にモナコで開催予定の次回のシンポジウムを楽しみにされていました。

先生の主な業績は、1) エナメル質形成のメカニズムとその進化の研究、2) エナメル質の蝕蝕の研究、3) 歯槽骨の機能と構造に関する研究、などでした。とくに、1) の研究では、哺乳類のエナメル質と魚類のエナメロイドについて深く研究され、フッ素などの微量元素の含有量と魚類の系統との関係に注目されたことは、私ども古生物学研究者に重要な示唆を与える

ものでした。これらの成果は、56冊に及ぶ著書 (Proceedings を含む)、75篇の原著論文、97篇の総説、116篇の指導論文、映画・ビデオ4本として残され、さらに国の内外の多数の学会・シンポジウムで発表されています。先生のご活躍ぶりは、並大抵のものではなく、歯学界の中でまさに抜きん出た大きな存在でした。これらの研究により、先生は1990年に IADR (国際歯科研究学会) から硬組織部門で優秀科学者賞を受賞されています。

私どもは、先生のあまりのご多忙ぶりに、いつかおからだをこわされはしないかと心配していましたが、まさにそれが現実のものとなり、もう少し早く先生にお話すべきであったと悔やまれてなりません。しかし、先生の残された業績はいまだによく理解されていないところもあり、私たちは今後ともこれらをよく学び、微力ながらできるかぎり受け継いで、発展させていきたいと思ひます。化石研究会および多くの会員は、須賀先生からさまざまな形で、ご指導・ご教示を受けました。さらに、化石研究会の活動に対しても多くのご協力を受けました。先生のご冥福を衷心より祈りいたします。(1993年3月15日)